

我々に対する扱いは比較的良好であって使役はほとんど海岸での荷役作業でした。終戦と同時に直ちに内地に帰還するものと思ひ備蓄してあつた糧秣を一時放出して米食をしましたが、帰還が容易でないことが判り、元の薯食に復し、再び現地自活が続きました。

日本内地と違って気温は絶えず二十五度くらいはあつて、薯も野菜も年数回栽培が出来るので大いに助かりました。

昭和二十一年五月、名古屋港に復員し、再び帰ることのないと覚悟して出た我が家へ帰り、家族との再会が出来ました。思ひ出の大陸、ラバウルに決別し、既に五十数年が経つて、当時の記憶も忘却の彼方に消えつつありますが、ただ戦争など再度起こつてはならないと祈願し、永遠の平和を子や孫に語り継ぐことを念願しています。

終戦で復員後、伯父の家に養子縁組みし、農家を継ぎ、妻には早死にされましたが、娘夫婦に囲まれて幸せな老後を楽しみながら生活しています。

父と慕う小森中佐を憶う

岐阜県 小林 仁 平

小森政光中佐は、近衛第二連隊第一大隊長で、私は大隊長の伝令を務めていたが、昭和十九（一九四四）年四月九日、ニューブリテン島で壮烈な戦死をとげられたことを知ったので、大隊長と伝令たる私、上官と部下の関係、ならびに小森支隊長の最期について申し述べる。

私は、東部第三部隊第一大隊の兵である。小森大隊長の伝令を一年間務めた夏のことである。第三中隊の三年兵は富士登山が出来るとのことで、大隊長殿の許可も頂いていた。

大隊長殿から「小林！ 私に動員令が来た。近衛師団で一人ということじゃが、どうしたことじゃろう」と、言われた。戦争は厳しくなっている。私は、富士登山を止めて、一週間準備に専念した。第一に、大本

營に用事に行った。南方作戦の戦況速報を受け取るためである。

ラバウル周辺のペララペラ島付近の戦況速報である。歩哨は下士官であったが、隊長の用件を伝えると通行が許されて、大本営作戦部から最近の戦況を私に渡された時は、身の引き締まる感じがした。

早速、それを大隊長殿に渡すと、私の労をねぎらった上で、日焼けをした顔で読んでおられ「戦闘指揮官としてラバウルに征く」と言われた。私は、ただならぬ決心でおられると感じた。

私は、「隊長殿！ 私は家族に千人針を作ってもらったことがないので、妹達に作らせ、隊長殿に差し上げたい」と申し上げたら、笑顔でうなずかれた。早速、連隊本部の電話で、高山裁判所に勤めている妹に直接電話をかけた。要旨は「私のお仕えしている、小森政光大隊長殿に動員令が来た。俺に作ると思って大至急、千人針を作ってくれ、頼む」。自分の父のような温厚な隊長殿に、私の心として持っていつてもらい、身を守ってあげたかったのである。

妹みつ、かよ子の二人が協力、町の辻々に立って、市民の皆々様に御協力を頂いたものだ。苦勞もあったろうが、四日後に連隊に送り届けられた。

小森大隊長に、訳を話して差し上げると、目頭を押さえられ喜んで「ありがとう」と言ってくれた。妹みつに電話でお礼の言葉があった。大行李、小行李ほか、なるべく身軽にして、東京駅から送り出す気持ちは親子の別離の気持ちがあった。

それから十五年程して、京都で第三中隊会が開かれた戦友の集まりには感動を覚えた。その時、九州の兵に、小森政光少佐殿は無事帰られたであろうかと尋ねた。誰かが「ラバウルから引き揚げられたとか？」私はその不確実な言葉を信じていた。高山と鹿児島との間は遠いこととて、元気でおられるものと信じていた。

ところが、平成十一年六月十五日発行の、近歩二会の会報「たちばな」により、戦死されていたことを知った。会報の詳細は、後記のごとくである。

そして七月二十三日付、静岡県函南町の白井富士雄氏より、小森少佐戦死の件と、遺族、花子未亡人につき、大要次の如き書翰を頂いた。

「昨年、本部常務理事藤井為五郎氏と「たちばな」の件で文通があり「小森少佐を知っているか」と問われました。私は、昭和十七年二月頃、埼玉県北足立郡白子村（現和光市）にて幹部の実設演習が行われ、昼夜にわたり白子原が雪でまっ白の中を對抗軍となって演習を行い、夜遅く宿舎（民家の大きな家）へ泊めて貰いました。防寒外套の雪が解けてビショ濡れでしたが、兵卒と少佐では寄り付き難く、遠慮していたら温顔そのもので、俺に構わず火力で乾かすようにと優しくも導いてくださいました。それが私としては初めてのおしまいです。

函南町に奥様が何処かに居られるようになるも聞き出せず困り、次男が函南町役場に勤務しているので尋ねたが、人の住所は法により教えられぬこととなっているというので、小森というお宅へ片っ端から電話をし、自分の身分を明らかにしながら尋ねてみることに

しました。「小森様ですか、お尋ねしますが、昔、近衛第二連隊に大隊長でおられた、小森政光少佐殿のご家族を尋ねておりますが、ご存じですか」と問うたところ、「私が小森の家内です」ということが解り、電話の上、平成十年十二月十八日に初めて伺いました。

函南駅待合室でお会いいたし、お宅へ伺い、神道のため仏壇が無いので遺影に二礼二拍手一礼いたし、その後、打ち解けてお話することが出来ました。藤井さんが「たちばな」四九号へ情報を二部お送りするというので小森様へ届いていると思います。藤井さんは第一大隊本部勤務、大兄は伝令で特別関係です。「たちばな」五八号の六十頁に（生かされなかったジャングル作戦報告として）藤井さんの原稿が記事として掲載されています」とあり小森未亡人の住所・電話など記されていた。

「たちばな」近歩二会 第五九号

噫呼！ 壮烈！ 鬼人も哭く

——小森支隊長の御最後（抜粋）（原文のまま）

曾て、私も支隊長が近衛歩兵第二連隊大隊長の折に部下としてお仕えした深きことであり、……また「たちばな」七号発行より二十六年も経過しておりますことと、小森支隊長御奮戦の模様は、戦況上奏で大皇のお耳に入り、御嘉賞を三度賜る光栄に浴したことは、近歩二連隊の輝かしき名誉と存じ、改めて再度「たちばな」の紙上にて発表の筆を執らせていただきました。

昭和十六年四月、近衛歩兵第二連隊即ち小園江部隊は内地へ帰還いたしました。

昭和十八年八月姫路第八一連隊へご転任されるまで三年六カ月の間、近歩二連隊の第一大隊長としてご在籍されておりました。小森大隊長は沈毅果断、不言実行、情けにも厚い典型的な武人で、深く尊敬していた方であると述懐されておられます。

姫路第八一連隊へ転任された小森大隊長は（第一大隊基幹）として小森支隊（独立歩兵大隊）を編成され、南方のニューブリテン島のマーカス岬警備の任務の命を受けて昭和十八年十一月現地へ出発された。

十一月末、ニューブリテン島北部のイボキに上陸し、二〇〇軒も南のマーカス岬目指し山を越えつつ進軍していた。ニューブリテン島の大きさは、九州と四国を合わせたより若干大きい、大きな島である。

マーカス岬まで一〇〇軒ほどの中程の行軍中の十二月十五日に、マーカス岬へ米軍が上陸を開始した。上陸の米軍は歩兵二個大隊、砲兵一個大隊の一千九百人。我が守備隊は当初、海軍監視隊二十人と急遽増援された、陸軍二個中隊（歩兵第一一五連隊高崎臨時編成）で合わせて四百人だった。

十五日夜明前の上陸第一波は、対空用の海軍一三ミリ機銃の射撃で、これが特に有効であって、敵のゴムボート十五隻のうち十二隻まで沈め撃退した。

ところが夜明けとともに、沖の敵駆逐艦十隻が猛烈な艦砲射撃を開始、さらに空より爆撃も加わり、我が方の海岸陣地は跡形もなく吹き飛んでしまった。

米軍は守備隊が手薄なことを知り、上陸前の砲爆撃を避け隠密上陸を考えていたが、予想外の反撃を食って改めて出直した。水陸両用戦車を先頭に上陸を再開

し始めたので、我が方の守備隊はジャングルに後退するしかなかった。

マーカス岬守備の主力となるはずの小森支隊はその時、一〇〇料先の山道をマーカス岬へ急ぎ行軍中であった。十八日に小森支隊の増援部隊となった歩兵第一四一連隊（福山）第一大隊戸伏長之少佐の部隊が追いつき合流した。支隊は十九日に後退してきた守備隊の中隊長らと連絡がつき、直ちに攻撃の準備に入った。

二十五日夜襲で敵陣に総攻撃をかけたが失敗。二十八・二十九日と再度の攻撃も敵の堅陣を抜けなかった。

師団の命令は、あくまで攻撃だったが、強行すれば戦死者が増えるばかりである。指揮官として悩みながら、小森支隊長は三十日以後は無益な攻撃を避け持久防衛に入った。

それでも支隊の敢闘ぶりは、一月四日の戦況上奏で天皇のお耳に入り「よく激励してやってくれ」とお言葉があった。これは直ちに方面軍を経て、六日電報で

支隊に伝達された。小森少佐は日誌に「この御嘉賞の御言葉に感泣、各隊に伝達したが、私は感激の余り眠れなかった」と記録した。真の御名誉であった。

産経新聞日曜版「あの戦争」の日誌覧には

二十五日（十）マーカス岬の米軍上陸地点に到着した。小森支隊約七〇〇が、夜襲で攻撃を開始。支隊の夜襲による戦死傷者続出して失敗。

二十七日（月）マーカス岬攻撃の艦爆三、零戦四機未帰還と報告される。

次に、昭和十八年十二月十五日、ニューブリテン島マーカス岬に上陸した米軍に対し逆上陸を命ぜられた戸伏長之大隊長は同誌の中で、

—この一人の軍人—小森支隊長
マーカス岬の戦場に、その徳を偲ぶ。

玉碎命令と淡々たる支隊長

支隊は、その後、命令に基き第一線を「マーカス」飛行場西側に配置し飛行場確保にあたることとなった

が、敵は海上機動により「オモイ」付近に上陸して翼側警戒の中隊と激突し、また一部は後方から支隊本部と大隊間に侵入して、側背を脅威するにいたった。

二月上旬、支隊は重なる御嘉賞のお言葉とともに「ここに三度御嘉賞のお言葉を拝す。武人の光榮、これに過ぐるものなし、断じて虜囚の辱めをうくることなく、武人の名譽を全うすべしのいわゆる玉碎命令を受領した。

紀元の佳節、支隊長は大隊本部に來訪、私をはじめ本部付将校全員に芋に米粉の混じった昼食を共にされ「目出度い紀元節だが、乾杯も出来ないね」と洩らされると陽気な大隊付軍医が「メンタツ酒ならあります」とその容器を差し出した。支隊長は「勿体ないよ」と笑いながらも、各人の水筒の蓋に一滴ずつたらし、皆でハッカの匂う水杯を乾杯した。

小森日記には「二月九日この命令について如何にしようかと一晚思案」と記され、また翌日は「終日、目まいがした」と記されてあったという。

指揮官の苦惱を胸に秘めながら、淡々として、しか

も明るい表情の支隊長を、今もなつかしく思い浮かべるのである。

このように戸伏長之大隊長は書かれており支隊長の転進と支隊長の最後についての文を読むにつき、私は（小林）涙を押さえることができませんでした。が、その概要は次の如くであります。

最後の日の近づくのを感じられた二月末、支隊は突然、敵との離脱と転進を命ぜられ、私は交戦中の第一線中隊を收容して支隊（小森）主力に合し、一旦、北海岸に進出した後、松田支隊残置糧秣の補給を受け、松田支隊主力が約一カ月前に撤退した道をタラセア半島に向かい転進することになった。目的地ラバウルは七〇〇軒であり、これから徒歩の強行軍となる。これは東京より岡山迄の距離に当たるのである。

我が軍の撤退を知った敵は飛び石伝いに、逐次、我が進路上に進出攻撃を繰り返すので、支隊長は、私の大隊を先行させて、所在の敵を駆逐し、進足を啓開さ

せ、自らは残余を指揮して殿（しんがり）となり、その後方を前進した。

ただ鱒坂中隊だけは小森大隊の患者を收容して、戸伏大隊後尾を続行させられた。転進路には、至るところに友軍の屍体が転がり、なかにはまだ息のある兵隊が戦友の屍と並んで倒れ、「殺して下さい、手榴弾を下さい」と叫ぶ。正に、この世の地獄である。

…進路上には、小舟艇で上陸し、わが落伍兵を掃討、拉致する敵小部隊が出没したが、大隊は実力でこれを撃破し、その捕虜を奪還しつつ前進した。

支隊長は、進路の啓開、渡河準備などで遽止急進する戸沢大隊と半日ないし一日の行程の距離をとり、師団との無線連絡を保ちながら続行されたが、大隊無線は破損して使用出来ず、大隊間の連絡は徒歩斥候によっていた。私（戸伏大隊長）は、あしかけ二日間大隊を停止させ連絡回復を図った。斥候を出し、支隊長等を捜索につとめたが、主力の行方は遂につかめなかった。すでに食糧は尽き、これ以上の停滞は許されぬので、不安を残しながらも前進に踏み切った。前進

の間も毎日前宿营地まで連絡斥候を派遣したが何らかの連絡をとれることを念願したが、遂になんらの手ばかりも得ないまま、タラセア半島を横断しラバウルに前進した。

戸伏大隊は苦難の末ラバウルに帰還出来たが後続の小森支隊以下主力は、遂に帰らず、後日僅かに将校以下十数人が身をもって生還したに過ぎなかった。

戦後、米軍公刊戦史に「小森日記」が掲載されて、はじめにその概要が判明した。すなわち、支隊主力は三月十二日、戸伏大隊の進路をはずれクフ河口近くで敵舟艇に急撃され渡河を断念し翌日山中に入った。

十七日には食糧が尽きて、止むを得ず海岸方向に進み、二十二日ようやく戸伏大隊の進路上に進出、十二人の溺死者を出してカブルグ河を渡河し、二十四日タラセア半島の首部に到着した。

問題は、二十五日に起きた。朝、土人畑の芋を集めて出発した支隊主力は一三・〇〇ごろ、敵の小部隊（将校斥候と記されている）と接触、転進の間に武器

をなくして装備に乏しかったためか、交戦を避け迂回し、タラセア半島横断を始めたのである。戸伏大隊の場合と異なり、横断距離が著しく長いので、これからの転進は、まさに飢餓の行進となった。

小森日記の最後は「三月三十一日非常に疲れた。そして食物がない」で終わっている。栄養失調の上マリアを誘殺した支隊長は、高熱を発して倒れ、諸隊に支隊長を意とせず前進を継続すべしと命じ、自らは、自決を意図されたが、徳を慕う副官、伝令など三人が進んで看護に残り、小康を待って転進を始めた。

支隊主力のその後の状況は依然、明らかでないが、支隊長は四月九日午前八時半ごろ、サンレモ農園付近で米海兵第五連隊E中隊の前哨に不意に遭遇し、壮烈な戦死を遂げられ、副官、伝令、またこれに殉じた。

米軍は、重傷の本部付伍長より支隊長の行動を承知し、また、中佐の日記を入手して、後日これを公刊戦史に記載された。

徳高く不滅の功績を残した偉大なる先輩に、このよ

うな最期を遂げさせるに至ったことは、返す返すも遺憾千万であり、悔いても悔いたらない痛恨事である。

戸伏大隊長の手記は以上で終わっているが、小森支隊長無事お連れしてラバウルに帰還出来なかったことは、自らが至らなかつたことを深く遺憾とし反省し、詫び入られている。

私小森は、小森大隊長が南方戦線でこのように苦勞されながら戦没されたことを、戦後五十余年経過して知り、静岡県函南町の白井富士雄さんよりお手紙で、小森大隊長の未亡人花子夫人の住所も知ることが出来ましたし、近歩二会第五九号「たちはな」で、同会本部の藤井為五郎氏の会員記事により、前に申した小森支隊長戦死に至る状況も詳細に知ることができ、また、大隊長の高き徳を偲ぶことができた。軍隊の生死を共にする上下の人間関係の実体験につき申し述べた次第である。